

# JLTA Newsletter No. 39

## 日本語テスト学会

### The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 39 発行代表者: 渡部良典 2015年(平成27年)10月19日発行  
発行所: 日本語テスト学会 (JLTA) 事務局  
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台1-1 順天堂大学さくらキャンパス  
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001(代表) FAX: 0476-98-1011(代表)  
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp URL: <http://jlta.ac>



\*\*\*\*\*

## 21世紀を生きる世代に残してあげたいこと

中村 洋一 (清泉女学院短期大学)

『大草原の小さな家』の、ローラ・インガルスが小学校の先生になって働いたのは、小さな子から成人に近い人達がひとつの教室で勉強する、one room schoolと言われていた学校でした。1950年代から、アメリカの学校は統合を重ね大きな規模になっていきましたが、近年この one room school の教育的効果が再評価されているそうです。もともと school という語には、「群れ、一族」といった意味が含まれているので、ひとつの部屋で助け合って学ぶ「家族」のような側面が見直されたのかも知れません。ちょうど同じ頃の日本にあった「寺子屋」の「読み・書き・そろばん」のように、one room school でも同様に、基礎的な学力を中心とした教育が行われていたようです。牧歌的で、のんびりした時代であったのかも知れません。

アメリカの1930年代に、The Original Carter Family というグループが「丘の上の校舎」の思い出を唄った “Schoolhouse on the hill” という歌があります。たぶん、当時は野生の動物や雨による水の被害などを避け、見通しと日当たりがよく、水捌けのいい、丘の上に校舎を建てたことが多かったのではないかと推測できます。創立140年を越えた、私の母校の小学校も丘の上に建てられています。現在の勤務校も、丘の上に建てられています。以下の歌詞にあるように、若く、喜びに満ちた、忘れがたい日々が描かれています。

Fond memory paints us scenes of other years  
Green be their memory still  
And bring amid those joyous scenes appears  
The schoolhouse on the hill

Oh the schoolhouse that stands upon the hill  
I never, never can forget  
Dear happy days are gathered 'round me still  
I never, no never can forget

one room school や寺子屋では、どんな測定と評価の活動が行われていたのでしょうか?それか選択肢がなかった、その時代の必然だったのかもかもしれませんが、Abraham Lincoln も、“School-house on the hill” の歌よりもずっと前に one room school で教育を受けていました。また、日本では、寺子屋での教育を土台にして、さらに私塾で学問を渴望した多くの力が、明治維新を切り拓いたと言っても差し支えないと思います。“House divided can not stand” (Gospel of Mark 3:25) をひいて演説し、建国以来のアメリカ分断の危機を救った大統領として記憶されている Lincoln の卓越した政治手腕や、限られた情報の中、黒船に向かって “I can speak Dutch!” と叫び、類い希な外交感覚を發揮した通詞、堀達之助のような「歴史を動かした人物」を軸に、この時代の教育成果を評価するとすれば、時代の要求を適格に見抜く「グローバル」な人物を育んだ、優れた教育であったと言えるのではないかと思います。

私事で恐縮ですが、この Newsletter が発行される頃までには、3 人目の孫が生まれています。おじいちゃん (私のことです、念のため) は、21 世紀を生きる Global Citizen として 21st Century Skills を身につけることを要求される孫達の世代に、何を残してあげられるだろうかと考えます。大学入試改革の議論では、教育活動全般に影響を与える可能性がある「教科横断型」テスト、「ランクによる評価」といった、測定と評価に関する課題が提案されています。次の世代の教育に関して、言語テスト研究は、今、何ができて何をすべきなのか、その解決のためのヒントは、もしかしたら、one room school や寺子屋の教育実践の中にも存在するのではないかと考えています。

**Report on  
The 41<sup>st</sup> JLTA Research  
Seminar**

**Jun. 13 (Sat)**

**於：東海大学高輪キャンパス**

**「学習者コーパスと評価：大学英語教育  
カリキュラムでの利用可能性」**

**報告者 長沼君主 (東海大学)**

2015 年 6 月 13 日 (土) に、東海大学高輪キャンパスにて、第 41 回言語テスト学会研究例会が開催された。テーマは「学習者コーパスと評価：大学英語教育カリキュラムでの利用可能性」で、近年、ケンブリッジ英検の産出データを用いた学習者コーパス (Cambridge Learner Coups) を利用して English Profile が開発され、CEFR のレベルごとの語彙や文法、音声等に関する基準特性 (criterial features) が明らかにされつつあるなどの現状を受けて、学習者コーパスと評価の関連について知見を集め、その教育的応用の可能性を議論することを目的とした。

研究例会では、国内におけるスピーキング学習者コーパス (金子恵美子、会津大学) とライティング学習者コーパス (山西博之・水本篤、関西大学) 開発に関する先進事例に加えて、東海大学でのライティング・スピーキング学習者コーパス (長沼君主、東海大学) 開発事例の 3 件の発表の後に、登壇者とフロアによるパネル・ディスカッションが行われた。

最初の発表テーマは、「スピーキング学習者コーパス：レベル指標となりうる基準特性」(金子) であった。CEFR を初めとする Can-Do リストは、教育現場に合わせフレキシブルに利用できる一方、この柔軟性を担保するため、あえて「曖昧」な表現とならざるを得ず、そのままでは活用しにくい面もある。コーパスを利用した基準特性の特定が日本でも進んでいるが、機械処理だけではなく、エラーを含む学

習者発話コーパスは人手による分析も不可欠である。発表では、CEFR-Jの基準特性研究で利用する文法項目の紹介と、機械処理では拾えないようなスピーキングの特徴が述べられた。

2つ目の発表テーマは、「関西大学バイリンガルエッセイコーパスプロジェクトの成果と展望」(山西・水本)であった。関西大学バイリンガルエッセイコーパス(KUBEC)プロジェクトは、日本の大学生が書いた英語・日本語のライティングのデータをコーパス化し、彼らの英日言語能力・ライティング能力の発達に関する知見や指導・評価上の知見を得ることを目的としている。このプロジェクトのより具体的な目的は、①大学生が授業で作成する作文データをコーパスとして蓄積し、②これをさまざまな角度から仔細に分析評価することにより、彼らの英語力の実態や英日ライティングにおける問題点を一層正確に把握し、③その成果を今後の大学での英語教育、ライティング教育に役立てようとするものである。発表では、これまでのKUBECプロジェクトの成果と今後の展望が報告された。

3つ目の発表テーマは、「東海大学学習者コーパス構築とライティング及びスピーキング評価改善の試み」であった。東海大学ではCEFRを参照した統一カリキュラムによる英語教育を進めており、中間及び期末評価において、統一ルーブリックによるライティング及びスピーキング評価を行っている。発表では、評価改善のため、外部評価者によるCEFRレベル評価と授業担当者による評価スコアとの対応関係を分析した結果について述べられた。また、中間・期末評価における学習者の作文・発話データを収集し、学習者コーパスの構築を試みることで、どのような基準特性が見られるか、CEFR評価との関係を分析した結果についても報告された。さらにエビデンスに基づいたCan-Doリスト改善の展望にも触れられた。

例会には20名の参加者があり、パネルディスカッションでは、フロアからの質問シートにも答えながら、コーパスの教育利用可能性について、活発な意見交換がなされた。コーパスのポートフォリオ的な利用など、今後より直接的な活用が求められるだろう。

**日本語テスト学会**  
**第5回最優秀論文賞**  
**受賞者から**  
**Message from the Recipient of**  
**The 5<sup>th</sup> JLTA Best Paper Award**

**飯村英樹 (熊本県立大学)**

人生、生きていくと良いことがあるものです。JLTA Journal Vol. 17 (2014) に掲載された私の論文 “Attractiveness of distractors in multiple-choice listening tests” が最優秀論文賞に選ばれたことは、大変光栄なことでした。結果のご連絡をいただいた時は非常に驚きました。

この論文は、受験者によって「選ばれなかった」錯乱肢の魅力度を調査したものです。一般的に多肢選択式テストにおける良い錯乱肢とされているのは、多くの受験者に選ばれるものとされています。一方、受験者から選ばれなかった錯乱肢は、魅力がないものとされ、修正されたり、別のものと取り換えられたりします。しかし、私自身が実際にテストを受験したり、指導している学生の様子を観察する限り、選ばれないから魅力がない、という考え方は少し違うのでは、と思う場面がありました。具体的に言えば、「迷いに迷って」複数の選択肢に翻弄されながら最後に1つ選ぶことがある、つまり最終的には選ばれなかったとしても、受験者を惑わすことができる錯乱肢が存在するのではないか、と思ったのです。この疑問を解決するために、錯乱肢の魅力度というテーマで研究を始めることとなりました。

実際に調査してみると、やはり従来から言われているように「選ばれなかった = 魅力がなかった」錯乱肢もありましたが、「選ばれなかったが、魅力があった」錯乱肢も確認することができました。

今回の研究では、リスニングテストの中でも3択の応答問題という比較的単純な形式を扱いました。査読者の先生からもご指摘いただきましたが、テ

スト形式が複雑になったり、テスト本文の難易度が上がるにつれ、考慮すべき要因が増えると思います。他の形式でも同様の結果が得られるのか、さらに研究を深めていきたいと考えています。

実は私はいつも「どうか当たりますように」とお祈りしながら、論文を投稿しています。論文投稿は私にとって宝くじを買うことに似ています。この「宝くじ」の結果が届くときは、震える手でマウスをクリックし、添付ファイルを開きます。最も緊張する瞬間です。「採択」の文字を目にした時の喜びは、何物にも代えられません。それまでの苦勞が報われる瞬間です。今回は、論文掲載に加えて、このような素晴らしい賞までいただくことができました。今後の研究を続けていくうえで、励みとなる貴重な経験をさせていただきました。査読者の先生方、最優秀論文表彰委員会の先生方、そして調査に協力してくれた学生みなさんに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

**海外の学会・研究会  
参加報告  
World Conference Reports**

**AAAL 2015 Annual Conference**

報告者 今野勝幸 (静岡理科大学)

大会名 : AAAL ACLA/CAAL Toronto 2015

開催日 : 2015 年 3 月 21 日

開催地 : Fairmont Royal York, Toronto, Canada

私自身は、人生で初めてのポスター発表という形で参加した。10 回の英語の授業を通した、動機づけ要因 (L2 自己や内発的動機づけ) の変動の分析結果を扱ったものが今回の発表内容である。先行研究の結果と理論を基に動機づけの介入をデザインし、実施したが、特に初学者の授業では変動が大きく、ある程度仮説が支持されたことを報告した。多くの方から質問、およびコメントを頂くこ

とができ、非常に有益なディスカッションを行うことができた。国際学会で発表を行うと世界がいかに広いかを実感でき、常に良い刺激を受けることができたため、今後も継続的にチャレンジしていきたい。

第二言語習得研究における他の分野と同様に、動機づけ研究の分野でも、近年、Complexity Theory の応用が注目されている。今回の AAAL ではこの理論についての Colloquium が開催された。例えば、1 回の授業の中でも学習者の動機づけは絶えず変化しているが、その変化の動きと原因を捉え、それらがどのように行動に現れているのかを検証するには、従来の研究手法 (例えば質問紙の使用、多変量解析による統計的分析) では十分に説明できない、と考えられてきている。動機の変化のみならず、L2 の習得と発達には様々な要因が複雑に絡むため、定量的な分析のみでそれらを捉えるのは難しい面が存在する。そのため、近年では Complexity Theory を応用し、統計的な分析のみならず、観察やインタビュー等を交えながらの動機づけの複雑かつダイナミックな様相を捉えようという動きになっている。今後の動機づけ研究では主流の研究スタイルとなっていだろう。私も勉強中であるため、参考になった Colloquium であった。Complexity Theory を用いた最近の研究は、Waninge, F., De Bot, K., Dornyei, Z. (2014). Motivational dynamics in language learning: Changes, stability, and context. *Modern Language Journal*, 98, 704-723.をご参照頂きたい。

また、菅野先生による講演 (Yasuko KANNO, Temple University, "English Language Learners, Identity, and Access to Postsecondary Education") が個人的には非常に興味深かった。他言語圏から英語圏に移民してきた生徒が、高校に編入学し、大学に進学するまでの難しさを扱った内容であるが、これは想像以上に難しい問題である。私自身もアメリカの高校を卒業するまでの過程を経験しているが、両親の都合などにより移住せざるを得ない場合、言語

的なハンデを負いながら文化的に順応し、ハイレベルな教育を受けるには、自分の意志による個人留学の場合とは違ったハードルが存在する。駐在員の家族として移住してきた日本人は経済的に恵まれる分まだマシであるが、そうでない他国からの移民が英語圏で成功するには想像を絶するほどの難しさがあると言える。海外で就学経験がある人であれば、共感・想像できる内容だったのでは無いだろうか。

今回の AAAL は自分でも発表できたことも含めて、非常に良い経験と出会いに恵まれた大会であった。来年度の AAAL は 4 月開催ということで、多くの日本人研究者にとっては参加が難しい大会になってしまうのが残念である。しかし、機会があれば、次も発表者として参加したい。

## The 37<sup>th</sup> Language Testing Research Colloquium

報告者 池田直樹 (メルボルン大学大学院)

大会名 : The 37<sup>th</sup> Language Testing Research Colloquium (LTRC)

開催日 : 2015 年 3 月 16 日~20 日

開催地 : Chelsea Hotel Toronto, Canada

第 37 回 Language Testing Research Colloquium (LTRC) が 3 月 16 日からトロントで開催された。通常は 6 月か 7 月に開催される大会であるが、今回は AAAL、TESOL という他の二つの大きな学会と同時期の開催であった。今回の大会テーマは "From language testing to language assessment: Connecting teaching, learning and assessment" であり、文字通り、stakeholder、feedback、washback、classroom、assessment literacy、learning というキーワードが様々な発表で見られた。

会場があるトロントの 3 月は非常に寒く大会実行委員会からの案内状に "Brutally cold" と記載されていた通り、外出すると顔面が凍るような寒さで、南半球から参加した私にはひととき寒さがこたえた。さらに自分にとっては初めての参加、発表でありプレッシャーと時差と気温で発表前から疲労がたまって

いた。時差で体内時計がおかしくなったというのもあるが、発表日 (大会最終日) まで連日 3 時間程しか眠れず、その後日に参加した AAAL の発表前日は非常に良く眠れたことが私の緊張の度合いを示している。ただ現地でお会いした茨城大の齋藤先生も時差で変な時間に目が覚める、とおっしゃっていたので自分だけではないということで安心した。

LTRC 直後の AAAL にも参加してみて実感したことであるが、LTRC には私のような初参加の院生に気を引き締めさせる雰囲気がある。二日目に出席した Newcomers' Session で司会の方が「ここには反対意見を述べて議論する事が好きな人たちが集まる」とおっしゃっていたが、この大会の都市伝説を以前聞いていたので意味はすぐに分かった。物理的な環境としては LTRC では同時間帯に発表が 3 つくらいしかない為、各発表会場には出席者が多く集まる。発表部屋の外は静まりかえっており、発表中に外をうろろしているのは業者の出展ブースの方々と私だけ (?) であった。私の発表にも多くの方が来て下さり、自分の研究で引用した文献の著者の方々も来て下さったのに気づいたときは Newcomers' Session の司会の方の言葉を思い出した。

発表前までの疲労はもう二度と味わいたくないというレベルであったが、大会の雰囲気は非常に素晴らしかった。発表内では気が引き締まるような雰囲気を作り、発表の後のティータイムや食事会では参会者の方々がお互いの再会を歓迎していて、このメリハリが LTRC の醍醐味であると思った。特に、大会運営委員長の Dr. Cheng が運営ボランティア学生さん達と同じ T シャツを着て演出を盛り上げていたのが印象的であった。参加前は気が重かったが、日本から参加され国内外で研究の最前線で活躍されている先生方に合間の時間や食事会でお会いできたのが私にとっては何よりの励みになり、参加して本当に良かった。院生にとっては発表を聴く以上の意義があることを実感した。

大会全体の印象として、一つ一つの発表が素晴らしいのは言うまでもなく、大会テーマのキーワードに関わる発表ではそれぞれの地域の教育環境も知る

ことができ興味深かった。ひとつ気づいたのは、これにclassroomの現場で言語教育に携わる先生方のより多くの参加と質疑応答があればさらに面白いかなとも思った。私は現在オーストラリア、ニューージーランドの言語能力評価の学会運営に携わっているが、我々の学会も現場の先生方の参加が重要であると認識しており、今回の大会サブタイトル“Connecting teaching, learning and assessment”が使命の一つと考えている。

それからもうひとつは、online、automated scoring、computer-based というキーワードを含んだ発表が割りとあったことである。これは現在では特に驚くべき事ではないかもしれない。今回の大会で Cambridge/ILTA Distinguished Achievement Award を受賞された Dr. McNamara が基調講演においてご自身のキャリアを振り返っておられたが、「過去数十年の言語能力評価の発展において、technology の発展が非常に重要な役割を果たしており、今後もこの分野を変えていこう」とおっしゃっていたのをふと思い出した。30年以上前の第1回LTRC大会でこのようなテーマの発表が今ほどあったのか私は分からないが、今回の大会を通して、constructs、context、feedback、washback、classroom assessment、technology、interfaces between SLA and language assessment research など言語能力測定、評価に関わる研究が多岐に渡っており、この分野の研究が社会において果たす役割と使命を改めて実感した。

## 書評 Book Reviews

### 『項目応答分析 Rasch モデル精察：教育・心理測定順序尺度を使用する文科系研究者のための二値・多値・多項 Rasch モデルの理解とその適用分析法』

井澤廣行・平越裕之 2013年 現代図書

Rasch モデルに関しての日本語の解説書は多くない。特にパフォーマンステストの分析で使用される Many-Faceted モデル（項目、学習者能力、意外にタスクや評価者の難易度も推定でき、本書では多項と呼ばれる）に関するものはほぼ皆無である。本書はその多項モデルの詳しい解説と、正・誤答のデータに使用される二値モデル（例えば、正解は1、誤答は0）、主にアンケートデータに使用される多値モデル（同意する、やや同意するなどの多値の選択肢を持つもの）、までの解説を試みた研究書であり、その副題にもあるように文系研究者を読者に想定している。

第一章では Rasch モデルができる経緯をラッシュ本人の回想をからめて追っている。テストによる能力の判定で問題になるのは、能力値がテスト問題に依存していることである。これはどの体重計に乗っても自分の体重は同じであるはずの「測定」の原則からはずれる。これを解決したのがラッシュモデルで能力値はテスト問題の難易度から独立して算定することができる。この特徴は実はラッシュモデルのみの特質であり、他の2パラメータ、3パラメータモデルの項目応答理論にはない特質であり、これがラッシュモデルの美である。これは「固有客観性」ということばで本章で導入されている。第二章はラッシュモデルの算出法、および能力値・項目難易度推定に使用されるアルゴリズムの解説である。第三、四章は二値データでの分析および、次元性（項目群が一つの構

成概念だけを測定しているかどうか)、項目の適合度(ラッシュモデルに適しているかどうか)、弁別力などについての解説である。ここが本書の中心といえ、さまざまな文献から二値データ分析結果解釈で注意すべき点がまとめられているので参考になる。第五、六章ではそれぞれ多値データ、多項データの解釈の例があり、それぞれのデータにある問題点(例えば、評価カテゴリが多すぎるなど)をどう解決したらよいかを説明している。ここでの実際のデータを用いた応用の部分は非常に参考になる。また第五章では多値データの導きかたを提示して、もともと $\beta$ - $\delta$ (能力値から項目難易度を引く)であった式が展開をしていくと $\beta$ のみ、あるいは $\delta$ のみになり、単独で算出できる「固有客観性」が実現できることがわかる。

しかしながら、本書は全体に固い文体で貫かれ、長い専門用語が続出し初心者には向いていない。ラッシュ上級者の困ったときの参考書として役立つ本であるが、残念なことに索引がない。それでも、和書での類書が存在しない現在、ラッシュの重要な三モデルを計算式を含めて概観することのできる唯一の書であると思われる。初心者向けではないが、参考書として手元に置きたい本である。

評者 齋藤英敏(茨城大学)

### 『英語リーディングテストの考え方と作り方』

卯城祐司(編) 2012年 研究社

『英語リーディングの科学』『英語で英語を読む授業』に続く第三弾として出された本書では、理論、実践に続いて、評価を扱っている。新指導要領において、高校で英語で英語の授業の指針が出されたのを受けて、二部構成の後半では、中高の教科書に基づいたリーディングテスト作成について解説をしている。次の指導要領では、中学においても英語で英語の授業を原則とすることが改革案に盛り込まれており、評価からどのように授業を逆向きに設計し、英語で英語の授業を促進するか、あらためて読み直すことで発見が得られるだろう。

リーディングテストの考え方を扱った第1部の第1章では大規模テストを紹介しつつ、学習指導要領を読み解き、求められる読解力の構成概念を議論している。また、入試問題の現状についても触れている。第2章ではさらにリーディングテストで用いられるテキストの影響を論じている。テキスト難易度だけでなく、ジャンルや文章構造についても触れ、一貫性を調べる因果ネットワーク分析を紹介している。また、TOEICで見られるダブル・パッセージ問題のような複数テキストでの読解モデル(個別表象、マッシュ、全索引、ドキュメント)についても詳しく扱っており、次の指導要領を考えるキーワードとなっている英語力の高度化の議論に参考になるだろう。第3章はテスト形式と読解力の関係についてであり、質問タイプや空所補充問題等に言及しつつ、多肢選択肢問題に多くの紙面を割いて論じている。第4章は語彙や文法も含む他技能との関連についてであり、技能統合型教育が求められる現在の新指導要領下において、音読や要約等が何を測っているのかを考えるのに役に立つだろう。第5章では第1部の最後としてテスト得点解釈の留意点について触れている。

第2部の作成編では、まず第6章で中学校におけるテスト作りについて述べている。「教科書で一度読んだ問題をテストで出すべきではないか」という疑問に答えるべく、テキストをパラフレーズする、内容と関連した別素材のテキストを扱う、オーラル・イントロダクションの内容もテキストに含めるなどの具体的な方法を紹介している。また、観点別評価についても触れつつ、15才の義務教育修了時に求められるPISA型読解力をどう測ることができるかについても述べている。第7章では続いて高校における教科書のテキストを利用したテスト方法として、クローズテストや誤り訂正問題を取り上げ、内容について述べた選択肢を初見の英文として読ませる、消えたパラグラフの内容を復元する、本文のサマリーや原典を活用するなどの方法を提案している。また、初見のテキストを利用した問題や「コミュニケーション活動」で求められるインプットをもとにしたアウトプットといった言語活動における評価についても触れている。第8章で

はさらに技能統合型の問題におけるリーディングの評価について詳しく掘り下げ、最後に第 9 章で多読や音読、小テストにおける評価について触れている。

現在、Can-Do リストによる到達目標の設定とともに、それを單元ごとの観点別評価と結び付けてパフォーマンス評価を取り入れることが求められているが、深いインプットの理解なしには、深いアウトプットは成り立たず、技能統合型の授業における評価を考える上で示唆に富む内容となっている。

評者 長沼君主 (東海大学)

### JLTA 事務局より連絡

#### Messages from JLTA Secretariat

JLTA の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

- (1) 会員情報や会費納入状況の確認・修正ができる「マイページ (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>)」はご利用いただいていますでしょうか。ログインに必要な会員番号とパスワードは、2014 年 4 月以降に配布しました。会員番号やパスワードを紛失された方は事務局 (rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp) までお問い合わせください。マイページ内の会員向けページにおいて、ニュースレターや最新号のジャーナル等の掲載があります。
- (2) 2014・2015 年度の会費振込について、これからの方は早急によろしくお願いいたします。2014 年度分のお支払いがない場合には、2016 年 4 月より、送付物の発送がなくなり、マイページの使用もできなくなります。

- (3) JLTA は 1996 年に設立され、2015 年に 20 周年を迎えます。全国研究大会は 1997 年から開始され、2016 年が第 20 回記念大会となります。また、JLTA や言語テストの歴史、最新の研究の動向などをまとめた、JLTA Journal Vol. 19 別冊 20 周年記念特別号 20 周年記念誌を作成中です。さらに詳細が決まりましたら、総会や Newsletter 等でお知らせいたします。

文責 : JLTA 事務局長 小泉利恵  
(順天堂大学)

JLTA 事務局次長 飯村英樹  
(熊本県立大学)

#### Messages from the Secretariat

We are thankful for your understanding of and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you may have.

- (1) Have you visited the "My Page" site (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>) where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment status? We have distributed (after April 1st, 2014) your membership number and password via email, both of which are necessary for the login. Please contact the Secretary General (rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp) if you need any assistance. You can see previous newsletters, the latest *JLTA Journal*, and other materials specifically for members on the "My Page" site.

(2) If you have not yet paid the yearly membership fee for 2014 and 2015, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2014, you will receive no shipment from JLTA and will not be able to use “My Page” site after April 2016.

(3) JLTA was founded in 1996, and the annual conferences started in 1997. Our 2016 conference will commemorate the 20th anniversary of JLTA. We are working on the *JLTA Journal* Vol. 19 Supplementary Edition, 20th Anniversary Special Issue, which includes historical and current developments of the JLTA and language assessment studies. We will announce more details at business meetings or in newsletters.

**JLTA Secretary General**  
**Rie KOIZUMI (Juntendo University)**  
**Hideki IIMURA**  
**(Prefectural University of Kumamoto)**

**次回 研究会案内**  
Next Research Seminar

第 42 回日本語テスト学会研究例会  
日時：2015 年 10 月 24 日（土）13 時 00 分～17 時 00 分

場所：常葉大学静岡キャンパス瀬名校舎  
テーマ：「多様な日本語環境にある日本語使用者のための会話能力評価—地域外国人にも注目して」

12:30～【受付】

13:00～14:15【基調講演】

鎌田修（南山大学）「日本語会話能力テストの研究と開発：国内外の教育環境及び多文化地域社会を対象に」

14:15～14:30【休憩】

14:30～16:00【事例研究】

1. 内山夕輝（浜松市外国人学習支援センター [U-ToC・ユートック]）「浜松版日本語コミュニケーション能力評価システム」

2. 入江友理（名古屋大学とよた日本語学習支援システム）「とよた日本語能力判定」

16:00～16:15【休憩】

16:15～17:00【フロアを交えたディスカッション】

参加費：会員無料、当日のみ参加 500 円

問い合わせ：谷誠司（常葉大学）

(taniseiji@sz.tokoha-u.ac.jp)

<編集後記>

大きく教育が動く中、次回の大会はいよいよ20周年記念大会である。英語教育の高度化が求められ、4技能型の評価にも注目が集まっているが、技能統合型の評価をどう考えていくかが問われるであろう。深い内化(インプット)のないところには、深い外化(アウトプット)は生まれず、どのように深い理解と理解への探究的態度を形成していくか、評価のもたらいうる波及効果について、幅広い議論を期待したい。(NN)

次のような原稿を募集しておりますのでどうぞお寄せください。1) 海外学会報告、2) 書評、3) 研究ノート、4) 意見、またその他当学会員の興味関心に沿うもの。



日本言語テスト学会事務局  
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1  
順天堂大学さくらキャンパス  
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001(代表)  
FAX: 0476-98-1011(代表)  
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp  
URL: <http://jlta.ac>

編集： 広報委員会  
委員長 長沼君主 (東海大学)  
副委員長 笠原究 (北海道教育大旭川校)

委員  
飯村英樹 (熊本県立大学)  
片桐一彦 (専修大学)  
齋藤英敏 (茨城大学)  
佐藤臨太郎 (奈良教育大学)  
宮崎啓 (慶應義塾高等学校)